

新 東条川疏水 ネットワーク 博物館構想

持続可能な社会の実現のために



地域の手で水の恵みを活かす

東条川疏水を活かした地域づくり

東条川疏水は、鴨川ダムを水源とする加東市、小野市に張り巡らされた広大な水路網です。そこには水の恵みを活かしてきた歴史、文化、技術が集積され、先人たちの知恵と工夫があふれています。東条川疏水ネットワーク博物館会議は、地域全体を博物館に見立て、疏水に学び、人々をつなぐ、新しい地域づくりをめざしています。





水の恵みと美しい北播磨

深く大きな東条湖。田畑や住宅地を流れる水路。穏やかで静謐な佇まいをみせるため池。水の恵みは、農作物を育て、人々をつなぎ、地域の景観を形成してきました。疏水が広がる北播磨の田園環境は、次世代に引き継いでいく地域の宝です。東条川疏水ネットワーク博物館会議は、美しい北播磨を再発見し、共有し、発信していきます。





疏水に学び、 コミュニティを育む

農業や社会について学ぶ疏水学習。世代間交流を促進する聞き書きプロジェクト。多様な人々の参加と協働を誘い出すアートワークショップ。こうした多彩な取組は、水の恵みを活かした出会いと交流の場づくりです。東条川疏水ネットワーク博物館会議は、疏水でつながるコミュニティの共創をめざします。



構想の改訂にあたって

東条川疏水ネットワーク博物館構想に基づく活動が、10年の節目を迎え、博物館会議構成メンバーなどの間から「構想の次のステージへの展開に向けて、今後どのような活動をいかに進めていくことが望ましいか検討する時期が来ている」との意見が挙がりました。そこで東条川疏水ネットワーク博物館会議では令和元年度より、アドバイザー会議や関係者によるワークショップ、幹事会などを通じて議論を重ねてきました。

その結果、東条川疏水を取り巻く情勢は、持続可能な社会の実現がより一層求められているものの、本構想の策定背景やねらいは現在も変わらず、その重要性が更に増しているとの認識を共有しました。

そこで、この構想に示す活動のねらいである「地域の手で東条川疏水を次世代に引き継ぐ」や、基本的な考え方の3つの柱を今後も堅持するとともに、2つの取組方針に沿って活動を進めることとし、その改訂にあたり新たなアクションプログラムと推進体制をとりまとめました。新たなアクションプログラムは、これまでの取組を踏まえて策定したことから、その意図や取組イメージを理解しやすくするため、その前段に10年間の取組について記載しました。

今後も、構築してきたネットワークをさらに拡充発展させながら、改訂する構想に描く持続可能な社会の実現に向けて博物館の取組を展開していきます。

目次

はじめに 02

第1章 構想のめざすところ

① 背景とねらい 03

② 基本的な考え方 04

②-1 考え方の3つの柱

②-2 実現のための取組方針

第2章 10年の取組をふりかえる

① 10年間の取組 05

①-1 「東条川疏水を核として地域の人々が学習の場として活用」の取組

①-2 「地域の様々な取組との相乗効果による普及・波及」の取組

①-3 構想の展開を支えるその他の取組

② 活動の成果と課題 07

②-1 「東条川疏水を核として地域の人々が学習の場として活用」の取組

②-2 「地域の様々な取組との相乗効果による普及・波及」の取組

②-3 構想の展開を支えるその他の取組

第3章 新たなアクションプログラム

① アクションプログラムの展開 15

①-1 疏水学習グループとつなげる取組群

①-2 博物館を支える基盤的な取組

② アクションプログラムの内容 17

②-1 疏水学習グループ

②-2 つなげる取組群

②-3 博物館を支える基盤的な取組

③ 実現に向けたロードマップ 21

③-1 取組体制

③-2 全体スケジュール

巻末資料 1. 東条川疏水ネットワーク博物館会議構成メンバー名簿
2. 改訂前の構想(平成23年度版)



はじめに

東条川疏水ネットワーク博物館構想策定から10年を迎えて

これまで10年の長きに渡り、東条川疏水ネットワーク博物館にかかわる色々な方が努力を重ね、疏水学習や聞き書きなどの教育的な取組や地域の団体と様々な活動を、ここまで続けてきたことに敬意を表します。

今後も子どもたちや地域の皆さんが、水の恵みを再認識して、東条川疏水が愛され活用される、開かれた取組にしていただきたいと思います。

また近隣で取組まれている同様の活動とも連携して、この大きな地域資源を継承してもらえたらとも思います。

継続は力なりです。是非多くの方にこの取組に参加していただき、それを大きな力にして、活動を持続させ、東条川疏水が兵庫県の大切な地域資源となりますように大いに期待しています。

東条川疏水ネットワーク博物館会議 名誉会長 内田一徳
(神戸大学前理事・副学長)

第1章 構想のめざすところ

1 背景とねらい

東条川疏水の恵みを受けるこの地域は日本でも特に雨が少なく、ここで暮らす人々は自分たちの生活を豊かにするために、井堰やため池を造り農業用水を得るための工夫や努力を積み重ねてきました。

長らく水不足に悩まされたこの地域では、先人たちの大変な努力と苦勞により昭和池の築造（昭和8年度完成）や鴨川ダム¹の築造をはじめ、曾根サイフォンや六ヶ井円筒分水など幹線施設では建設当時の土木技術の粋を集積して整備し、地域の農業や生活用水に活用され、優良な農業地域へと大きく変貌させました。

しかし現在では、東条川疏水によってもたらされる水の恵みを実感して感謝する世代は少なくなりました。今日の経済システムが、このままでは持続できないことが明らかとなる中、持続可能な社会を実現していくという、新しい方向性が求められています。

地域の資源を見つめ直し、地域にできること、地域がなすべきこと、そして地域の大切な資源である東条川疏水を核とした地域づくりについて共に考えていく時期が来ています。

そこで東条川疏水ネットワーク博物館（以下：博物館という）の創設に向けた趣旨を明らかにする「東条川疏水ネットワーク博物館構想」（以下：博物館構想という）は、東条川疏水にまつわる、過去と現在と未来、水と人、人と人のネットワークの力を高めることにより、「持続可能な社会の実現のために地域の手で水の恵みを活かす」ことをめざしています。

2 基本的な考え方

②-1 考え方の3つの柱

(1) 「東条川疏水」の名前を地域や地域外に定着させる

これまで、この地域全体の水利施設のネットワークを表す名称がなかったことから、「東条川疏水」という名称を、地域の人々やその活動をつなげ・むすびつけるキーワードとして地域や地域外に定着させます。

(2) 持続可能な社会の創り手を育てる学習の場として活用する

東条川疏水など地域のことを教材として、それが持つ「教育力」を最大限に活かし、学習の場として活用するとともに、その際に地域を学ぶ教材などを充実させます。

(3) 既にある資源や活動を「ほりおこし・つなげ・むすびつける」ことにより取組の輪を広げる

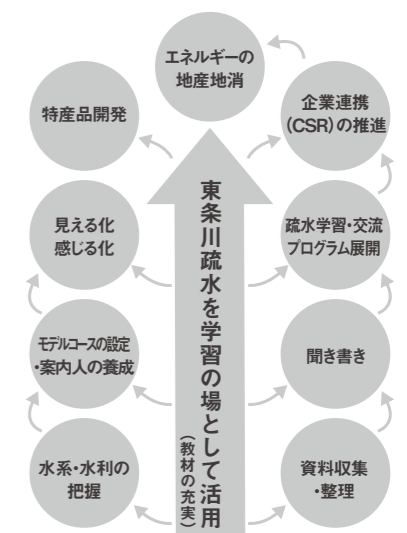
地域の水利施設としての魅力を「ほりおこし・つなげ・むすびつけ」で考えるとともに、地域にある活動や取組を「ほりおこし・つなげ・むすびつける」ことによって、地域の人々にとって楽しめる場、誇りを持てる場として取組の輪を広げます。

②-2 実現のための取組方針

考え方の3つの柱を軸に、「東条川疏水を核として地域の人々が学習の場として活用」と「地域の様々な取組との相乗効果による普及・波及」の2つを取組方針とし、これに基づいてアクションプログラムを展開します。

平成23年度に策定した構想[※]の第1章「背景とねらい」や第2章「基本的な考え方」は、新しい構想においても継承することから、この改訂では社会情勢や10年間の活動成果に応じた用語への置換えにとどめ第1章に要約を記載しました。

※改訂前の東条川疏水ネットワーク博物館構想（平成23年度版）は巻末資料に示す。



取組展開イメージ図

第2章 10年の取組をふりかえる

1 10年間の取組

博物館では、平成23年度からの10年間に、博物館構想で定めた基本的な考え方の3つの柱に基づき、その実現を図るため2つの取組方針に従い活動を展開してきました。

①-1 「東条川疏水を核として地域の人々が学習の場として活用」の取組

小学校における疏水学習をはじめ東条川疏水を地域の学習教材として活用し、水の恵みを次世代に引き継ぐ様々な取組を進めてきました。



①-2 「地域の様々な取組との相乗効果による普及・波及」の取組

多様な人や組織、団体などが、東条川疏水にかかわる様々な地域資源を活かした活動の創出や参画により、取組の輪を広げネットワークを形成してきました。



①-3 構想の展開を支えるその他の取組

博物館構想の実現をめざす2つの取組方針に基づき、取組が円滑になされるように支援活動を展開してきました。



2 活動の成果と課題

博物館構想を策定して以降、様々な活動を通じて東条川疏水ネットワーク博物館会議構成メンバー*（以下：博物館会議構成メンバーという）や関係者の相互理解が促進されました。また同時に、これからの課題も明らかになってきました。

*東条川疏水ネットワーク博物館会議構成メンバー（令和2年度末時点）は、巻末資料に示す。

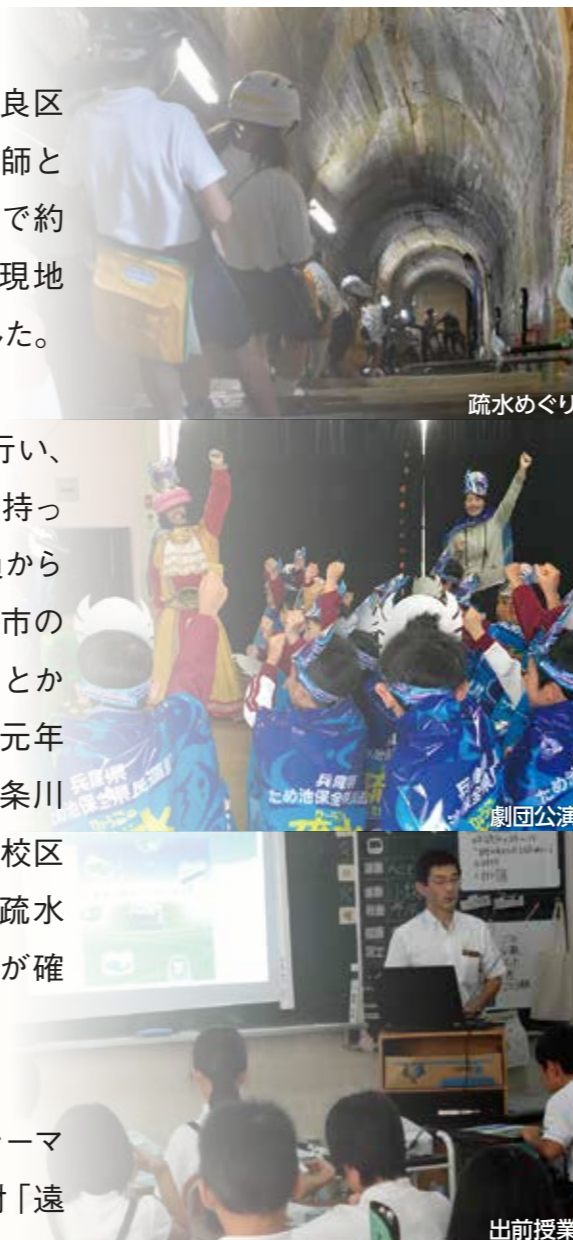
2-1 「東条川疏水を核として地域の人々が学習の場として活用」の取組

(1) 成果

疏水学習では、小学校へ兵庫県東播土地改良区（以下：土地改良区という）や行政の職員が講師として出向く出前授業の参加人数が、延べ43校で約1,700人（平成23～令和2年）に及び、この他現地で施設を見学する疏水めぐりなどを実施してきました。

疏水学習は、その学びの過程で現地見学を行い、施設の規模を体感することができるため、興味を持って疏水に対する理解を深めることができたことと教員からも高評価を得ています。これまで小野市・加東市の教育委員会や各小学校と連携を継続してきたことから、両市では疏水学習が定着しています。令和元年度に小野市・加東市の小中学校で実施した、東条川疏水の認知度調査の結果、疏水学習を実施した校区では、そうでない校区に比べ児童生徒の東条川疏水に対する認識はたいへん高く、疏水学習の効果が確認されました。

NPO法人メダカのコタロー劇団は、疏水をテーマとする公演や東条川疏水開発に関する補助教材「遠



い水の路」の朗読劇を、小学校やこども園などで実施してきました。劇団員が扮するキャラクターによるプログラムは、子ども達にも親しみやすく好評です。

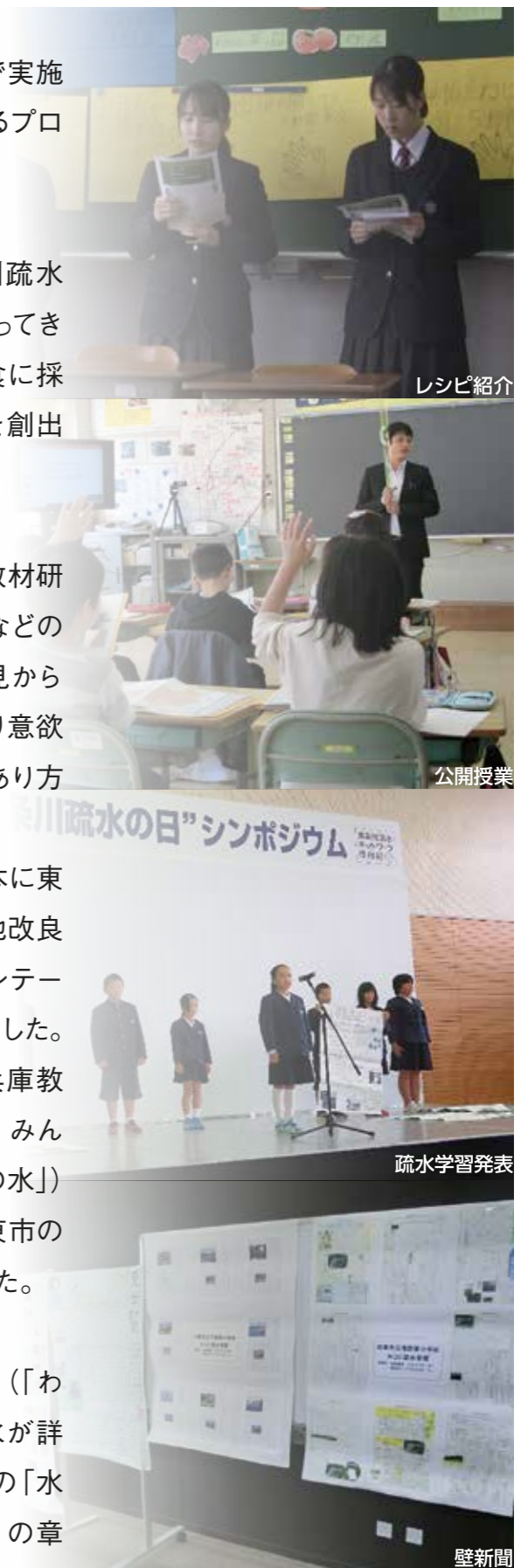
兵庫県立社高等学校生活科学科は、東条川疏水で育まれた農産品にこだわったレシピ開発を行ってきました。その内いくつかは加東市内の学校給食に採用され、児童生徒と高校生の新たなつながりを創出し、東条川疏水の理解促進に役立っています。

兵庫教育大学は、東条川疏水を対象とする教材研究やその開発に携わり、副教材や学習指導案などの提供を行ってきました。併せて小学校教員の意見から学校現場の状況も踏まえ、児童の理解が深まり意欲が高まる授業となるよう、効果的な疏水学習のあり方を検討しました。

その結果、各市で作成する学習教材の副読本に東条川疏水を取上げるとともに、出前授業では土地改良区職員など外部講師が教員の問いに答えるコメンテーターとして参加する形態への移行が望ましいとしました。

そこで授業モデルを検討し、令和元年度に兵庫教育大学附属小学校の協力を得て、「わたしの水 みんなの水」学習指導案（単元「わたしの水 みんなの水」）を作成して授業を行なうとともに、小野市・加東市の社会科担当教員を対象に公開授業を行ないました。

小野市・加東市では、新しく作成した副読本（「わたしたちの小野市」「かとう学」）に東条川疏水が詳しく取上げられました。小野市では、この副読本の「水はどこから」や「先人がひらいた東条川疏水」の章



を活用することで、4年生における社会科カリキュラムに疎水学習を位置づけて、授業を実施できる条件が整いました。そして、令和2年度には、社会科担当者会で単元の学習指導案を作成し研究授業が始まりました。



(2) 課題

疎水学習は、非常に高い評価を受けていますが、農村地域出身の教員は少なく、農家で育った方はまれなため、東条川疎水のような農業用水利施設は、教員にとって必ずしも身近で扱いやすい教材ではありません。また、出前授業や疎水めぐりは、日程調整、時間確保、バスの手配などの準備作業に加えて、博物館活動の予算との調整も大きな負担となっています。効果的な疎水学習を継続していくためには、関係する教員と事務局（県民局）の情報共有を図り、これらの負担軽減が求められます。

授業では、教科書の事例を使って進めることが一般的です。そのため、東条川疎水を学ぶ出前授業や疎水めぐりが授業の流れと関連なく実施された場合、外部講師に全てを委ね教員が深く関われなかったり、事前学習の不足が生じたりすることがあります。また、外部講師となる土地改良区や行政の職員の授業は、教員が求める内容とはならず施設の概要説明に終始してしまうこともあり、その内容について教員との連携を深めることが課題となっています。

教員が東条川疎水を教材として取上げ易くするためには、副読本を活用した学習指導案や学校ごとの適切な教材を整えることが重要です。また、必要に応じて地域の農家、土地改良区や行政の職員が外部講師として授業に参加し、天候に左右される用水確保の不安や施設を維持する苦勞、収穫の喜びなど、現場を知る者でなければ話せない事柄を児童に伝えることが大切になります。

東条川疎水は、学習指導要領（2017年改訂）で強調されている地域資源の活用に適した教材です。そして、社会科や総合学習以外の教科においても様々な可能性があり、今後はカリキュラムマネジメント^{*}の観点から、新たな取組を始める必要

があります。

※ 一つの教科だけでなく複数の教科で同一の教材を用いるなど、教科横断的な学習を設計すること。その際には、地域の現状に関する調査や各種データを取り入れることで教育内容の質の向上を図り、また地域等の外部の資源の活用をしながら効果的な教育活動を考える。

②-2 「地域の様々な取組との相乗効果による普及・波及」の取組

(1) 成果

博物館構想では、地域に以前からある取組や行事と積極的な連携を進めてきました。例えばウォーキング大会や観光協会が企画するバスツアーのコースに東条川疎水の施設を組み入れました。そして、参加者向けに、東条川疎水と山田錦をはじめとする農産物とのつながりや、東条川疎水と地域の生活の関わりについて伝えてきました。



神戸芸術工科大学は、大学生が参加するアートワークショップや、鯉のオブジェとともに東条川疎水を巡る「鯉の里帰りツアー」などに取組んできました。こうした取組を通して、地域の親子が大学生とともに楽しみながら東条川疎水を知ったり、学んだりする場が創出されました。



東条湖おもちゃ王国は神戸芸術工科大学と連携して、来園者が参加するアートワークショップを実施し、作品づくりを行ないました。さらに仕上げた作品を活かして、インフォメーションコーナーにレリーフ壁画を設置しました。



土地改良区は、管理する幹線水路を利用した疎水

下り（水路 de ポート探検）を平成 29 年度から実施しています。この取組は毎年、応募者多数の人気行事となっています。

大阪大学の大学院生は、フィールドワークで出会った地域のカフェとのつながりを活かしてフォトコンテストや写真展を開催しました。地域で実現したこの試みは、博物館構想の活動を博物館会議構成メンバー以外にも拡大していく取組として注目されました。

博物館会議では、構成メンバーの専門性を活かし、相互に連携を図ることで博物館構想に基づく取組の輪を広げてきました。そして近年になり主体的な提案による自律的な活動が見られるようになり、それを博物館活動に活かすため、令和元年度からこのスタイルを「手挙げ方式」と呼び積極的に取組を始めました。



(2) 課題

これまでの取組では、博物館会議構成メンバーや関係者の連携を促進するため、まずは接点をつくることを優先し、事務局（県民局）主導の取組になりがちでした。そのような取組では、構成メンバーの専門性が十分に活かせなかったり、それぞれが抱える課題の解決につながりにくかったりした可能性があります。さらに、構成メンバーが博物館の取組に対して受け身になると、その意義や価値の共有も不足しがちになります。取組の内容を共有し、必要に応じて相互連携や支援を実施するためには、構成メンバーによる主体的・自律的な活動（手挙げ方式）への移行が必要です。

これまで東条川疏水をキーワードとして、当初は、主に受益地域内の関係機関（地域の行政機関を中心に、土地改良区、農業協同組合、地場産業関連団体、商工会議所、まちづくり協議会、自治会組織、各種市民グループなど）に博物館活動へ

の参加を促し、取組を展開してきました。しかし近年は、博物館会議構成メンバー以外の人や組織が参加する事例も増えてきました。

そこで、新たな参加や連携を促進するため、こうした活動を支援する仕組みを調べ、情報発信にも注力していくことが重要です。また、博物館構想の取組に参加した人々にとって、この取組が地域の誇りを醸成する場、楽しい交流の場となるように、開かれた活動を心がける必要があります。

大きな変化を伴う時代にあって、博物館構想に取組む人や組織、団体などは多様化し、活動内容も自由な発想で展開する幅広いものになってきました。こうした状況を活かして、博物館構想をより創造的に展開するためには、これまでの 10 年間の取組内容や、東条川疏水を取り巻く社会情勢について、多角的な視点から考察し、今後の活動のあり方などについて俯瞰的に議論していくことが重要になります。これまで以上に、学識者などの意見交換を進める必要があります。

②-3 構想の展開を支えるその他の取組

(1) 成果

博物館構想の取組開始から 5 年後、平成 27 年度に、この取組をより円滑に実施するために、「東条川疏水ネットワーク博物館会議」を立ち上げ、博物館構想に基づく取組のプラットフォームづくりに着手しました。

具体的には、ロゴマークの制定、東条川疏水の説明看板や道標の設置、額装写真による移動美術館の開催、ジオラマ模型や紹介パネルの市役所・図書館ロビーでの展示、東条川疏水を紹介するリーフレットや疏水カードの配布などを行ないました。また、広報パンフレットや動画、ホームページの制作運営など、地域における認知度の向上や博物館会



議構成メンバー相互のネットワーク強化を図ってきました。

「聞き書き」は平成24年から実施しています。地域の古老の思い出や言い伝え、東条川疏水との関わりなどを若者が聞き取り、記録し、作品として残してきました。「聞き書き」で得た、東条川疏水にかかわる地域の体験や思いを記録として、地域で共有する意義は大きく、また聞き手の成長もみられ、有意義な取組として高く評価されています。これまでに語り手が22名、聞き手が26名参加し、作品集は東条川疏水のアーカイブとして貴重な資料となっています。

他にも、東条川疏水にかかわる「資料収集・整理」を行い、社会科担当教員などによる東条川疏水の教材化や授業の実践研究の基礎資料として活用されています。こうした取組と並行して、加古川流域における東条川疏水の位置づけを示す研究も進めました。

平成27年に、11月23日*を「東条川疏水の日」として（一社）日本記念日協会に登録し、その年から毎年記念行事を開催しています。「疏水の日に関連行事」は、博物館会議構成メンバーや関係者が集い、活動を紹介し、相互理解を深め、ネットワークを広げる好機となっています。また、新たに人や組織、団体が参加するきっかけにもなっています。

*東条川疏水の源である鴨川ダムの竣工日を記念日とした。



聞き書き



東条川疏水の日記念行事



東条川疏水の日記念行事



活動発表

(2) 課題

博物館会議は、東条川疏水を取り巻く人や組織、団体などによる様々な活動のプラットフォームの役割を果たしてきました。今後も活動を継続し、その質を高めていくためには、取組の定型化や省力化、精通するコーディネーターの設置など、事務局機能を見直し、活動の実施体制を調える必要があります。また新たな人や組織、団体の参画を得るためには、開かれた場をつくっていくことが求められます。そのためには、構築してきたネットワーク及びコンテンツの管理や活用を進める必要があります。

これまで活動に要する経費は、県民局予算を充当してきましたが、必ずしも安定していませんでした。今後も継続していくためには、取組内容を精査し絞り込むとともに、他の財源確保についても検討する必要があります。

「聞き書き」については、活動意義は大きく今後も博物館の主要な取組と位置づけるとともに、これまでの記録を地域固有のアーカイブとして地域学習に活用することが望まれます。

「疏水の日に関連行事」では、博物館会議構成メンバーや関係者間で情報交換が行われ、取組の輪が広がりネットワークが強化されることが重要です。またこの行事は、新たに人や組織、団体などが博物館会議に参画する機会となっています。このような観点から、その企画運営においては、関係者同士の連携強化を図り、情報を共有し、交流を深めるための工夫が求められます。



第3章 新たなアクションプログラム

1 アクションプログラムの展開

博物館構想に基づく活動が10年の節目を迎え、博物館会議構成メンバーなどの間から「構想の次のステージへの展開に向けて、今後どのような活動をいかに進めていくことが望ましいか検討する時期が来ている」との意見が挙がりました。そこで東条川疏水ネットワーク博物館会議では令和元年度より、アドバイザー会議や関係者によるワークショップ、幹事会などを通じて議論を重ねてきました。

その結果、東条川疏水を取り巻く情勢は、持続可能な社会の実現がより一層求められているものの、本構想の策定背景やねらいは現在も変わらず、その重要性が更に増しているとの認識を共有しました。

そこで、この構想に示す活動のねらいである「地域の手で東条川疏水を次世代に引き継ぐ」や、基本的な考え方の3つの柱を今後も堅持するとともに、2つの取組方針に沿って活動を進めることとしました。

10年間の取組を通じて得た知見と構築してきたネットワークをさらに活かし、今後も円滑に取組が展開されるように、新たなアクションプログラムと推進体制についてとりまとめました。

①-1 疏水学習グループとつなげる取組群

新たなアクションプログラムでは、取組方針やその形態によって2つのプログラムを展開することとしました。

その1つは「疏水学習」です。10年間の活動を通じて疏水学習は、博物館構想のねらいを実現する取組として非常に高い評価を得ており、新たなアクションプログラムにおいても最優先の取組に位置づけました。今後も疏水学習を円滑に継続し、学習効果を高めるため、関係者の課題や情報の共有をより密接に行なうことが重要です。そこで東条川疏水を学習の場として活用する、「疏水学習グループ」を形づくることにしました。

もう1つは、博物館会議構成メンバーなどによる自律的な取組の展開です。近年、それぞれの専門性を相互に共有し、良好な協力関係が構築されるようになってきました。それに合わせて主体的・自律的な取組（手挙げ方式）を支援する仕組みを構築してきました。

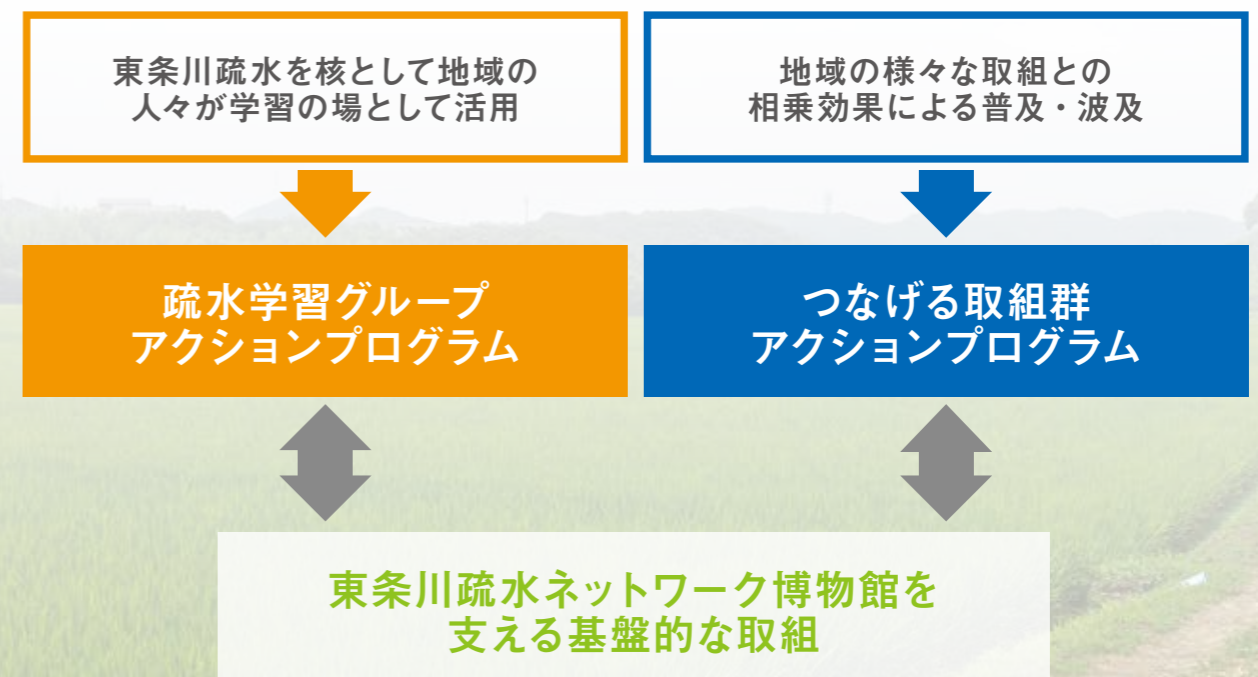
こうした取組を通して、これまでにない連携が生まれており、博物館構想実現に向けた新たな動きの萌芽となっています。そこで博物館会議構成メンバーによる取組や、新たな人や組織、団体が実施する博物館構想実現に向けた取組を集約し「つなげる取組群」と呼ぶことにしました。

①-2 博物館を支える基盤的な取組

推進体制は、2つの取組（疏水学習グループ・つなげる取組群）の規模や内容などに応じ、活動が円滑に持続し展開できるプラットフォームとしての機能を整備します。

併せて東条川疏水ネットワーク博物館の固有の取組として、「聞き書き」や「疏水の日」の関連行事」の開催を実施します。

また事務局として取組の展開や安定した運営をめざして、東条川疏水の地域における認知度の向上のための情報発信や活動を支える財源の確保を図ります。



② アクションプログラムの内容

②-1 疏水学習グループ

博物館構想の基本的な考え方「持続可能な社会の創り手を育てる学習の場として活用」を今後も継続していくため、疏水学習を推進します。児童にとって身近なところに有りながら普段は見ることのない施設の学習を進め、水の恵みを実感するなど、学習効果の高い取組を、疏水学習グループとして展開します。

取組イメージ

(1) 疏水学習の効果的運営

効果的な疏水学習を円滑に継続できるように、教育委員会や小学校の教員、アドバイザー、外部講師を務める土地改良区や行政職員、農家などによる疏水学習グループを構成し、課題や情報の共有をより密接に行います。



教員の授業づくりの負担軽減を図るため、これまでの取組で得た情報や実績を活かしながら、出前授業や外部講師、疏水めぐりの手続きや現地での施設説明、児童向け資料や補助教材「遠い水の路」の活用など、疏水学習のパッケージ化を図ります。

例えば、疏水学習の実施計画は、小野市・加東市の教育委員会や各学校の活動に併せ毎年各市で作成し、各学校の取組を市内で連動させ、疏水めぐりの配車を複数校で一体的に調整し、経費の節減や財源の確保に係る情報の共有に取組み、教員や事務局の負担軽減を図ります。

(2) 教員への授業支援

学習効果の高い疏水学習を進めるためには、教材の作成や有効な学習指導案が必要となります。そこで疏水学習グループでは、各市教育委員会や兵庫教育大学などとの連携によるフィールドワークや共同授業研究を進めます。そこでは既存資料の収集・整理、東条川疏水副読本の作成、地域教材の公募や表彰、教えたい教材の開発、それらを活用する学習指導案や教材の共有化を図ることを通して、疏水学習の授業に取組む教員を支援します。



また疏水学習の授業で求められるコメントや伝えるべきことを焦点化することで、そのニーズに合った外部講師（地域農業に精通する農家、農業水利施設を管理する土地改良区職員や行政関係者など）の名簿の提供や、教員対象の研修会を開催することで、疏水学習を実施しやすい環境づくりを進めます。

(3) 新たな教科での展開に向けて

小学校の学習における東条川疏水の活用は、小野市・加東市で使用している小学校4年生社会の教科書（東京書籍「新しい社会」）では、県内の伝統や文化、先人の働きについて学ぶ単元「谷に囲まれた台地に水を引く」の学習において、地域教材として取組まれることが多くなっています。また、同じ4年生社会の人々の健康や生活環境を支える事業について学ぶ単元「水はどこから」の学習でも、東条川疏水の活用が考えられます。

さらに4年生国語の新聞づくりでの活用、このほか補助教材「遠い水の路」の朗読劇の鑑賞や疏水関連施設の写生などでの活用も考えられます。疏水学習をこうした活用につなげることで、カリキュラムマネジメントの実現を進めていきます。

また、総合的な学習の時間や加東市が進める「ふるさと学習」との連携も検討していく必要があります。

将来、複数の教科で東条川疏水を教材とする疏水学習に取組むことを視野に入れ、博物館活動では東条川疏水に係る新聞づくりや観劇、施設の写生会などを実施し、そこで得た知見を疏水学習グループや学校現場で共有します。

②-2 つなげる取組群

東条川疏水を地域の人々にとって楽しめる場、誇りを持てる場として取組の輪を広げるため、博物館会議構成メンバーをはじめ、新たな人や組織、団体などの積極的な活動が求められています。博物館会議では、これらをつなげる取組群として支援します。



取組イメージ

(1) 博物館会議構成メンバーなどによる提案型活動の実施

連携する人や組織、団体などに博物館構想の実現に向けた提案を積極的に行い、東条

川疏水の役割や機能を伝える活動への参画を促します。

また、多様な活動の創出を図るため、近年移行しつつある博物館会議構成メンバーの主体的・自律的な取組(手挙げ方式)の定着を図ります。そのために幹事会などを通じて活動の提案を促し、その内容を共有して協議や助言の機会をつくり提案内容に応じて活動を支援します。

(2) 新たな人や組織、団体などの参画に向けて

近年、博物館会議構成メンバー以外の人や組織、団体などによる東条川疏水も材料にした自主的な活動が多数始まっています。こうした傾向は、博物館会議にとっては望ましい状況であり、さらに連携、支援を進めたいと考えています。



しかし、これまでは博物館会議構成メンバー以外を直接対象とする支援制度がなく、このような人や組織、団体などとの連携や協力がしづらい状況でした。地域には博物館構想に沿った活動が更に潜在していると考えられることから、それらに博物館活動への参画を促すため、新たな助成制度の創設や疏水の日に関連行事での情報共有などの機会を設けていきます。また、各種媒体を活用した情報発信に一層努め、開かれた活動としての接点を創り出します。

(3) アドバイザーなどによる研究会の開催

新たな2つのアクションプログラムを検討する中で、アドバイザーは博物館構想の実現に向けた活動のあり方などについて引き続き意見交換を行う必要があるとの意見で一致しました。

そこでアドバイザー同士の自由な意見交換の場を設け研究交流を促進することにより、東条川疏水を多面的多角的な視点から掘り下げ、博物館の取組の展開に寄与するアイデアを提供するとともに、構想に基づく活動の創造的な議論を促進させ新たな取組に活かしていきます。

②-3 博物館を支える基盤的な取組

今後の活動は新たな2つのアクションプログラム(疏水学習グループ・つなげる取組群)に移行することから、それに併せプラットフォームとして持続可能な推進体制の構築を進めます。また博物館構想の主な取組に位置づけられてきた「聞き書き」と「疏水の日に関連行事」は、博物館会議を支える重要な取組として今後も継続的に実施していきます。

取組イメージ

(1) 事務局機能の再編

これまで事務局(県民局)は、企画調整や行事实施、県民局事務などを包括的に担ってきましたが、新たな2つのアクションプログラムの規模や内容などに応じて、円滑な活動が展開できるプラットフォームとして推進体制の再構築を進めます。

今後、事務局活動の幅を広げ、質を高めるために、これまでの取組に精通し様々な人や組織、団体などが主体的に博物館活動に参画できる場(幹事会やアドバイザー会議、各種提案活動など)を運営するコーディネーターを配置します。

また東条川疏水の認知度を向上させるため、多様な人や組織、団体などが情報を受けたり気軽に発信したりできるツールとして、SNSやオープンソースアプリを活用し継続的に情報発信を行いネットワークの強化を図っていきます。

これまでに設置した道標、制作したジオラマ模型や額装写真など啓発資料のほか、ホームページやロゴマーク、映像資料や印刷物など知的財産の管理を適正に行います。

この他、これまでの事務局業務を見直し、定型化や省力化することで持続可能な推進体制の構築を図ります。

活動経費については、県民局予算に加え各種補助金や助成制度を活用するなど、様々な財源を確保し、財政的な面での安定した支援体制の構築を検討していきます。

(2) 主な取組の実施

聞き書き： 東条川疏水を核として、地域の人々が学習の場として活用し、地域の知恵や記憶を次世代へ継承していく活動として「聞き書き」を継続します。



また「聞き書き」で得た成果は、疏水学習の教材として様々な活用が考えられ、その資料としての重要性も増しており、聞き取り記録した作品集は、東条川疏水の貴重なアーカイブとして活用します。

疏水の日に関連行事： 博物館会議では、これからも東条川疏水の日(11月23日)に併せて総会や活動発表会を毎年開催します。

この取組は、東条川疏水にかかわる人や組織、団体などが相互につながるきっかけづくりであり、情報や関連する活動状況を定期的に共有する場づくりです。開催スタイルなどについては、持続的な運営となることを優先しその都度検討します。

3 実現に向けたロードマップ

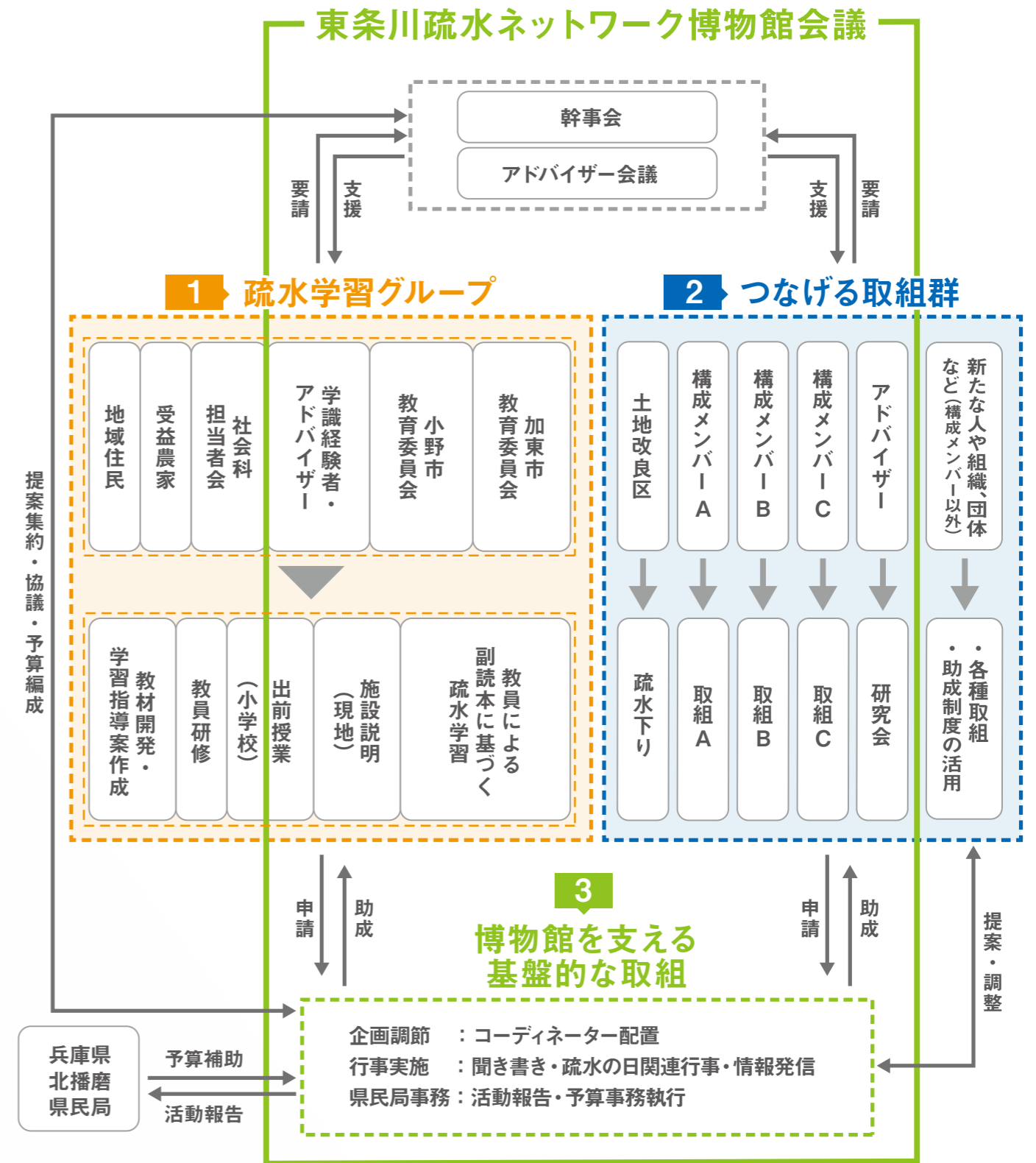
3-1 取組体制

図1、図2の通り、幹事会、アドバイザー会議に加え、疏水学習を推進する「疏水学習グループ」を形成します。「つなげる取組群」は、人や組織、団体などの主体的な提案を、自律的な取組により推進していきます。これらの取組の企画調整や活動、博物館を支える基盤的な取組を、事務局が担っていきます。

図1 それぞれの活動方向とアクションプログラム

	活動の方向	アクションプログラム
1 疏水学習グループ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 疏水学習の継続的な推進 ・ 学習効果の高い取組を展開 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 疏水学習の効果的運営 ・ 教員への授業支援 ・ 新たな教科での展開
2 つなげる取組群	<ul style="list-style-type: none"> ・ 博物館会議構成メンバーの積極的な活動の推進 ・ 取組の輪を広げる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 構成メンバーなどによる主体的・自律的な活動（手挙げ方式）の実施 ・ 新たな人や組織、団体などの参画の促進 ・ アドバイザーなどによる研究会の開催
3 博物館を支える基盤的な取組	<ul style="list-style-type: none"> ・ 上記2つの活動を円滑に推進する体制の構築 ・ 博物館を支える取組の継続 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事務局機能の再編 ・ 主な取組の実施（聞き書き、疏水の日関連行事）

図2 東条川疏水ネットワーク博物館会議 令和3年度からの活動体制



③-2 全体スケジュール

今後10年間のスケジュールを示します。

丸枠囲みは、3年毎を目安としためざす姿（イメージ）です。



アクションプログラム	今後の主な取組 (今後10年間項目例)	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	2028年度	2029年度	2030年度		
		3年度	4年度	5年度	6年度	7年度	8年度	9年度	10年度	11年度	12年度		
1 疏水学習 グループ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 疏水学習の効果的運営支援 ・ 教員への授業支援 ・ 新たな教科での展開 	副読本による疏水学習の実施		全希望校の疏水めぐりを支援				疏水学習のパッケージ化とその活用					
		フィールドワーク・教材開発		開発した教材や学習指導案の共有化				カリキュラムマネジメント展開					
		カリキュラムマネジメント試行											
2 つなげる 取組群	<ul style="list-style-type: none"> ・ 博物館会議構成メンバーなどによる主体的・自律的な活動の実施 ・ 新たな人や組織、団体などの参画 ・ アドバイザーなどによる研究会の開催 	手挙げ方式の定着化助成制度の創設・運用		博物館会議構成メンバーの主体的・自律的な活動が安定的に展開				開かれた自由な博物館会議の雰囲気醸成					
		助成制度をきっかけに多様な人や組織、団体などの参画				研究会成果を博物館の取組にフィードバック							
		研究会の実施											
3 博物館を支える 基盤的な取組	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事務局機能の再編 ・ 主な取組の実施 《聞き書き》 《疏水の日に関連行事》 	コーディネーターの配置		情報発信・ネットワーク強化		事務局業務の定型化・省力化				地域運営組織の法人化			
		聞き書きの継続実施と成果の活用		疏水の日に関連行事を活動の情報共有の場として実施		活動費の支援体制強化							

巻末資料

1. 東条川疏水ネットワーク博物館会議構成メンバー (令和2年度末時点)

区分	組織・名前	組織・役職等	備考	
名誉会長	内田一徳	神戸大学 元理事・副学長		
会 員 (20名)	兵庫県北播磨県民局	局長	会 長	
	小 野 市	市長(地域振興部) 教育委員会	副会長	
	加 東 市	市長(産業振興部) 教育委員会	副会長	
	兵庫県東播磨土地改良区	理事長(事務局長)	副会長	
	小野商工会議所	中小企業相談所長		
	加東市商工会	事務局長		
	下東条地区地域づくり協議会	会長		
	東条湖商店会	会長		
	味彩会	前代表		
	三草ふれあい広場	会長		
	兵庫県釣針協同組合	参事		
	東条山田錦振興会	会長		
	JAみのり	営農企画課長		
	JA兵庫みらい	めぐり創生課長		
	(株)夢街人とうじょう	社長		
	(株)土肥富	代表取締役		
	東条湖おもちゃ王国	東条湖リゾート 総支配人		
	(株)神戸新聞社 北播総局	北播総局長		
	支援・ 協力団体	アド バイ ザ ー	南 埜 猛	兵庫教育大学 教授
			岸本清明	花園大学 非常勤講師
田中丸治哉			神戸大学 教授	
谷口文保			神戸芸術工科大学 准教授	
松本文子			大阪大学 特任助教	
畑中直樹			大阪大学 招聘教官	
阪上弘彬			兵庫教育大学 助教	
学 識 経 験 者		福井茂樹	兵庫教育大学 副学長	
		吉水裕也	兵庫教育大学 理事・副学長	
		今村文彦	神戸芸術工科大学 名誉教授	
協 力 団 体		おのハートフル歩人会		
		加東市観光ボランティアの会		
		うれしのふるさとたのしみ隊		
		加東市老人クラブ連合会		
支 援 団 体		近畿農政局		
		加古川西部土地改良区		
		北はりま田園空間博物館		
	(株)地域計画建築研究所(アルパック)			
兵庫県土地改良事業団体連合会				
事務局	兵庫県北播磨県民局	加古川流域土地改良事務所		

2. 東条川疏水ネットワーク博物館構想 (平成 23 年度版 はじめに 第 1 章、第 2 章 抜粋)

平成 23 年度に東条川疏水ネットワーク博物館研究会を発足させ、地域の関係者による議論を経て、「東条川疏水ネットワーク博物館構想」を策定しました。そこには取組の意図や方針が示されていますので、以下にその背景やねらい、基本的な考え方を示します。

はじめに

農は国の礎である。農が衰えても栄えた国は、これまでの世界の歴史では例がない。その理由は、農業が国民に食料を供給するだけでなく、農地や水に関係して国の財産や環境を守っているからである。農業や農村は、地域の生態系や生物多様性の保全、洪水防止、地下水涵養などの多面的機能を有しており、山林や里山とともに、上流側の農山村地域だけでなく、下流側の都市域住民の財産や環境も守る機能を有しており、こうした多面的機能を維持することが今後の大きな課題である。

農業にとって、水は欠かすことができないものである。しかし、日本列島の地形は急峻で、河川の流れは急であり、その利用はなかなか容易ではない。しかも地球温暖化による降雨形態の変化や地球規模での砂漠化の進行などにより、水資源は枯渇する方向にあり、農業用水を含めた水資源確保は今後の大きな課題である。

この地域は瀬戸内気候であるため、比較的降水量が少なく、農業用水はこれまでため池に頼ってきた。戦後の食料増産に向けた新たな水源を確保するために、鴨川ダムが建造され、その農業用水を配るための東条川疏水が建設された。しかし、最近における過疎化・高齢化による地域農業の衰退や、混住化による地域住民における非農家の増加によって、本地域における「水の恵み」に対する認識が薄れつつあると考えられる。

こうした現状を鑑み、上記 2 つの課題を解決するためには、「地域の手で次世代のために水の恵みを活かす」活動が必要であると考え、東条川疏水ネットワーク博物館研究会を昨年 6 月に発足させた。これまでの約 10 ヶ月間に 3 回の研究会及び 5 回の各地域座談会を開催して、「地域の手で次世代のために水の恩恵を活かす」ための東条川疏水ネットワーク博物館構想をまとめたものである。本構想が、少しでも本地域に恵みをもたらしてくれることを期待してやまない。

平成 24 年 3 月 東条川疏水ネットワーク博物館研究会 会長 内田一徳

(神戸大学大学院農学研究科研究科長・農学部長・教授)

第 1 章 背景とねらい

(1-1) 背景

長らく水に苦勞した地域

この地域は日本でも特に雨の少ない地域で、河川の利水も制限されていたために、日本有数のため池密集地帯として知られています。

かつて、この地域に暮らす人々は自分たちの生活を支えるために用水や池をつくるなど、水を得るための工夫や努力を積み重ねてきました。しかし、現在確認できる江戸時代以前の記録でも、水争

いが絶えない地域であったことが伺えます。

大切な水を地域に届ける「東条川疏水」

このように長らく水に苦勞したこの地域において 1928 年（昭和 3 年）に昭和池築造が始まり、1949 年（昭和 24 年）には戦後初めての国営事業として鴨川ダムが着工しました。鴨川ダムが完成した 1951 年（昭和 26 年）には、地域に水を届ける幹線水路の建設が始まりました。

戦後復興の象徴「開拓地」へ水を届ける「東条川疏水」

また、戦後の「緊急開拓事業」による草加野万勝寺地区の開墾地や嬉野地区は台地上にあるために厳しい状況でしたが、1958 年（昭和 33 年）に 400ha にも及ぶ開拓地に鴨川ダムの水をポンプで汲み上げて送れるようになり生活が安定しました。

高度な土木技術が集結する「東条川疏水」

東条川疏水には、昭和池や鴨川ダムはもちろん、建設当時の土木技術では不可能とされた「船木池」のアースダム、当時の土木技術の粋が集積された「安政池」、大きな谷を渡る 1,087m もの曽根サイフォンや、水を公平に配分する六ヶ井円筒分水など、高度な土木技術が集結しています。そして、今日では播州米のほか、酒米の「山田錦」を産するなど、優良農業地域へと大きく変貌しました。

(1-2) ねらい

地域の手で東条川疏水をより良い形で次世代に引き継ぐ

このように先人たちの大変な努力と苦勞によってつくられた東条川疏水によって、現在の地域の水田や生活の水の活用がされています。しかし、昭和初期当時の様子を知る人は 21 世紀に入った現在、数少なくなっています。また、東条川疏水によってもたらされている水の恵みについて実感を持って感謝する世代は少なくなっている状況です。

いま、私たちの社会は、社会システムや経済システムの全般にわたって、これまで経験したことのない規模での大変革を迫られています。大気、水、生態系などの劣化は地球規模で急激に進行しつつあります。もはや大量生産・大量消費・大量廃棄を基軸とする現代の経済システムは、このままでは持続できないことが明らかになってきました。

これまでの経済システムを見直し、地球上の限りある資源を共有しながら持続可能な社会を築いていくというまったく新しい方向性が求められています。

次世代は、地球環境や経済問題において、さらに厳しい状況となることが予想されます。そのために地域の資源を見つめ直し「地域」にできること、「地域」がなすべきこと、そして、地域の大切な資源である「東条川疏水」を核とした地域づくりなどについて共に考えていくべきではないでしょうか。

また、昨今の多発する災害予防の観点からも、まず、地域の人々が現在の地域の資産である「東条川疏水」についての認識を深め関心を高めることにより、災害防止につながります。

現在、既に地域の持つ力を活かし、活動をつなげ、結びつけることにより、「東条川疏水」には疏水にまつわる水と人、人と人とのネットワークの力を高めることにより、「地域の手で次世代のために水の恵みを活かす」ことをめざします。

また、この「東条川疏水ネットワーク博物館構想」が、隣接地域へ効果的な波及を及ぼし連携による相乗効果によって、次世代へより良い地域を引き継ぐことをめざします。

第2章 基本的な考え方

(2-1) 「東条川疏水」の名前を地域や地域外に定着させる

1. 「東条川疏水」の名前を地域や地域外に定着させる

「東条川疏水」は、それぞれの水利施設が段階的に整備され完成し、また、日常生活の中で私たちの目にする施設が「昭和池」、「鴨川ダム」、などそれぞれ独立したものとして捉えられており、この地域全体の水利施設全体のネットワークを示す名称が明確に認識される機会がありませんでした。この構想においてこの地域の水利施設全体のネットワークを「東条川疏水」として位置付け、今後は、この「東条川疏水」という名称が核となって地域の人々やその活動をつなげ・むすびつけるキーワードとして地域や地域外に定着させます。

2. 地域を担っていく次世代を育てる学習の場として活用する

特に、地域のことを教材として、地域の持つ「教育力」を最大限に活かし、今後、地域を担っていく次世代を育てる学習の場として活用します。そのために、地域の子どもたちが学校などで地域のことを学ぶ際に活用できる教材などを充実させます。また、「学校教育」のみでなく「社会教育」の場面において大人も地域を学べる機会を設けます。

3. 既にある資源や活動を「ほりおこし・つなげ・むすびつける」ことにより取組みの輪を広げる

ハード面での「東条川疏水」は、現代の私たちにとって決して「新しく作られる施設」ではなく、以前から地域に馴染んだ施設です。この「東条川疏水ネットワーク構想」では、その「既に地域にある、地域にとって大切な施設」を改めてみつめ、魅力を掘り起し、それぞれの水利施設をつなげ・むすびつけて考える「東条川疏水」に地域にある活動や取組みを「ほりおこし・つなげ・むすびつける」連携によって「東条川疏水」を地域の人々にとって楽しめる場、誇りを持てる場として取組みの輪を広げます。

(2-2) 実現のための取組方針

考え方の3つの柱を軸に、以下の取組方針に基づいてアクションプランを実施します。

1. 東条川疏水を核として地域の人々が学習の場として活用

「東条川疏水」を地域の学校教育教材、社会教育教材として活用することにより、理解の促進を進めます。

2. 地域の他の取組みとの相乗効果による普及・波及

東条川疏水の教材としての活用を中心に取組みを進める中で、様々な地域資源や活動、取組を「ほりおこし・つなげ・むすびつける」輪を広げ、相乗効果による普及・波及をめざします。